埼玉県小・中学校等英語指導力養成講座　中嶋先生への質問～受講者振り返りより～

【マンダラート・マッピングについて】

Q1 「マッピング」によって、児童生徒が生き生きと英語を話す映像に衝撃を受けました。すべてを名詞で書いていくなど、いくつかのことは分かりましたが、もう少しくわしく教えていただけたら有り難いなと思いました。

● 大修館書店『英語教育』10 月号（9 月中旬発売）の特集記事で詳しく書いておりますので、それをご覧ください。実際の授業の映像もたくさん入っているので、参考になると思います。

Q2 本日は貴重なお話をありがとうございました。マッピングを行う際に、日本語で書いていくのはできそうなのですが、それをもとに英語で話したり、会話をしたりと言うのがなんとも難しいと感じてしまいます。中学生で、マッピングから英語でアウトプットできるように持っていくには、どのようにしたらいいでしょうか？

● 大事なのは、マッピングで書いたキーワード → より詳しく描写をするフレーズにする → 「動詞の一覧表」を使いながら英文にする（教科書に出てくる「基本文」を参考にする）と言うプロセスが必要になります。さらに、Q＆A の練習を型通りに行うのではなく、キーワードを深める質問を全体で訓練する（幾つもの質問を考える）ことが大事です。教科書を先に進む、デジタルコンテンツを見せるという授業では、そのような時間が取れず、いつまで経っても「話せる、書ける」子どもは育ちません。教師が、授業の内容（単元全体のプログラム）を考え、系統性、一貫性のある指導を心がけることが大切です。

Q3 これまで、マッピング作りは学期末スピーチの準備の際に取り組ませてきました。左から右に情報が細かくなるようなマッピングを今後やらせてあげたいと思いますが、このような活動は数多く取り入れるべきなのでしょうか。特にどのような場面で取り入れることが効果的なのか(ライティング、スピーキングなど)を知りたいです。

● 思考ツールを使える場面かどうかは子どもたち自身が判断します。思考ツールは出力だけでなく、入力の場面でも使えます。教師は、まず「思考ツール」を紹介している書籍でどんなものがあるのか、またそれはどんな時に有効なのかを知ることが大事です。金太郎飴のようにワンパターンの授業では、学習者は乗ってきません。ある単元はカレーライス、またある単元はシチューのように「テーマやメッセージ」は異なっています。単に文法を教えるためのものではなく、教科書はキャベツと同じと考えてください。それ自体は食材（素材）であり、そのままでは、子どもにとって目を輝かすものにはなりません。学習指導要領と言うレシピを使って、それをロールキャベツにしたり、ポトフにしたり、回鍋肉にしたりできる力、つまり授業デザイン力を身につけなければなりません。

Q4 マンダラマッピングについて、先生はテストで生徒が一生懸命取り組み、書いて表現できるようになったと例を見せていただきましたが、一枚の紙（プリント）で毎回とりくませていますか。あるいは、ノートで生徒に取り組ませていらっしゃいますか。また、定期テストでまとまりのある文を書くことができているようですが、どのタイミングで書かせる活動に取り組ませていますか。また、書くことを取り組ませるときにどの程度の時間を作っていますか。（この夏、先生の講義を 2 回受けることができ、本当に

良かったです。授業づくりは反省点だらけでした。２学期から生徒のために頑張りたいと思います。）

● 特に、マニュアルはありません。ご紹介した手法は all mighty のものではなく、あくまでもクラスの実態を活かし、適宜、教師が自分で「工夫」を加えていくことによって、自分自身の「実践」となります。How to 本を読んでもうまくいかないのは、自分で考えないからです。ご自分で計画をたて、内容を欲張らずに精選し、できることから取り組んでいかれることをお勧めします。また、一人でやらずに、同僚または友人と一緒に取り組むことで、話題が増え、より正しいやり方が見えてくるようになります。そういう意味では、研究授業（公開授業）で他の方々から幅広い意見をもらうことで、今の授業を改善することができます。

Q5 小学生がマッピングするときに、ひらがな・カタカナでメモすることになると思いますが、小学校で学習していないような内容を児童が言いたいという場合はどのようにしたら良いでしょうか。（今まで学習した表現に寄せて言う、シンプルな英語を教える）表現がふくらみすぎることがかえって児童の負担にならないか、心配しています。また、質問力を高めることは、学習した表現を使いこなせるようになる、ということなのか、それとも、新たに表現を教えるような帯活動をすることなのか、他校の実践を詳しく教えていただきたいです。

● 質問力を高めるとは、基本的に「今持っている力で伝えられる」ように指導をするということです。質問ができるためには、内容を理解し、掘り下げられる部分を見つけなければなりません。それは教師が教えることではなく、一人ひとりが気づいていくことであり、そのためには「マッピングの履歴を見ながら振り返る」という指導が不可欠です。現在、多くの小学校で インタビュー ＆ マッピングに取り組んでおられるようですが、振り返りの時間をきちんと帯学習の中に入れているかどうかがポイントになります。それによって、次回の取り組みに活かされるようになるからです。そのような時間をしっかりと確保するためには、教師が教科書を網羅的に指導しなければならないという考えをリセットすることが大事です。デジタルコンテンツで使うものを選ぶ、練習から言語活動に繋げるためには、言語活動の内容を単元が始まる前に「生徒に手渡す Can-do」に書いておく必要があります。力をつけるためには、教師が、全体を見渡し、繰り返し習熟する内容（できるようにすること）を特化することが大事です。

Q6 左から右へ進むインタビューマッピングがわかりやすいとの振り返りがあり使ってみたいと思いましたが、自己紹介以外での小学校５・６年生での題材ではイメージできませんでした。教材研究を進める中で考えたいとは思いますが、今までに具体的にどのような場面での活用実践があったのか教えていただきたいです。

● 全ての small talk のお題で使えます。ただし、教師から与えるお題ではなく、子どもたちにアンケートで尋ねた内容から選ぶようにするのがコツです。教師がコントロールしようとするのではなく、あくまでもペアで話し合い、自分たちで選べる（自己決定）ようにすることです。さらに、やりっぱなしで終わるのではなく、違う友だちに small talk の内容をレポートするというようにすると、「思考・判断・表現」の力が高まっていきます。

Q７ 本日はありがとうございました。マッピングを活用した話す活動、非常に魅力的だと感じました。語彙力、文法の知識が乏しく、マッピングの作成もおぼつかないような低学力の生徒に対し、どのような手立てが考えられるか、お聞かせいただけますと幸いです。

● 大修館書店『英語教育』10 月号には、高知県四万十市の小学校５年生がマッピングに取り組んでいる様子が映像（QR）で見られます。それをご覧になると、ハッとされると思います。教師が ALT との TT でマッピングを指導しているのですが、デモンストレーションではなく、子どもたちを巻き込みながら（子どもたちに「どうすればいい？」と考えさせながら）一緒にマッピングを板書していかれます。すると、子どもたちがマッピングの図を見ながら、色んなことに気づき、アイデアを言うようになります。授業では、教え込むのでは（それは教師のエゴ）なく、あくまでも子どもたちの「気づき」をどう引き出すかが、授業を活性化させるコツです。思考ツールの活用は、年齢、能力（学力差）と比例の関係にはありません。

【単元構想・授業づくりについて】

Q8 "バックワードデザインを用いた授業づくりを始めたところです。ゴールを明確にすることにより、言語活動の作り方や展開を考えることが以前よりもスムーズになってきました。一つ悩んでいるのが、ゴールから逆算していくときに、中間評価や効果的なフィードバックを、どのタイミングで入れたら良いのかを悩んでいます。何か良い方法があれば教えていただけたらと思います。"

● 単元を１つのまとまりとして考えるようにすると、活動と活動のつながり、練習と言語活動のつながりが意識できるようになります。中間評価やフィードバックは、ある程度見通しを保つために用意をしておくことは必要ですが、決め決めでやってしまうと、タイミングがずれてしまう（十分に習熟していない、子どもの関心が次に向かっている、など）ようになります。よって、常に「振り返り」で子どもたちがどのような状況なのかを読み取る努力をすること（子どもとのインタラクション）、臨機応変にそれを設定することが大事になります。

Q9 目的･場面･状況を定めた､生徒が主体的になれる言語活動の例をたくさん紹介していただきました。そういった活動を考える際に意識したほうがいいことや参考にできるものなどがあれば教えていただきたいです。

● 教師が「教えなければ」と構えてしまうのではなく、「遊び心」を持つこと、さらには「一味加えれば美味しくなる」観点は、教師よりも子どもの方が得意であるということを知っておくことです。子どもたちに、「もっと、書きたいという内容にするにはどこをどう変える？」と聞いてみるのです。すると、教師が思いもつかないようなことがどんどん出てきます。授業名人は、自分が目立つ授業ではなく、子どもから学ぶ授業、子どもを活かす授業を心がけておられます。

Q10 子どもの実態把握や個々の習熟度の把握が重要であるとありましたが、どのような工夫をして実態把握を行っていますか。

● 実態や習熟度は、出力をした時でないと分かりません。つまり、練習（デジタル教科書の活動を含む）が多い、教師の説明やドリル学習が多い場合、「できているかどうか」は判断できません。むしろ、教師が黒板やパソコンの前から離れて、子どもたちのつぶやきを聞く時間を増やすことです。さらに、座席表

を「カルテ」にして、気づいたことを随時、それにメモをするようにしていけば、個々の変容がわかるようになります。何よりもそれを記入する習慣をつけることで、「洞察力」が磨かれていきます。パソコンを操作し、指示をしているだけでは子どもの実態も習熟度も分かりません。子どもを自立できるように育てることで、ペアやグループでの取り組みの時間が増え、教師はそこで気づいた子どものよさ、モデルとして紹介することができるようになります。

Q11 生徒が台本もなくあれだけ考えて英語で発表し、また質問ができるようになるためにはどれだけの準備や授業をしてきているのかを教えていただけると嬉しいです。

● 「ノートに英文を書いて覚える」というプロセスでは、伝えることよりも覚えることに気持ちがシフトされてしまいます。ワークシートを使う活動では、ワークシートを終わらせることが目標になってしまうのと同じです。日頃から、写真や絵を自分の知っている単語や文で描写をする練習をルーティンにすることで、それができるようになるまで何度も自分で練習をするようになります。教師が「させる」のではなく、「できるようになりたい」という気持ちから「自分でしたくなる」というベクトルを作ることが大事です。

Q12 大変勉強になる講義をありがとうございました。授業の中で書く活動があまりとれていないと感じています。何か効果的な活動があれば教えていただきたいです。（例えば、既習事項使ってなど）

● 中学校であれば、「リレー・ノート」（大修館書店『英語教育』2022３月号の連載記事）がお勧めです。全国の中学校、高等学校でその実践が広がっています。なぜなら、自分たちが自己決定をし、自分たちで学び合うという学習になるからです。「書きたい内容」は、子どもたち自身が持っています。ただ、簡単な内容にばかりなってしまうのを避ける意味で、教師が習った言語材料を積極的に使って書いている部分を取り上げ、クラスに具体例として取り上げてやることが必要です。作者が誰かわからないようにして、それをコピーし、全員で読ませて「何に気づいたか」を話し合わせます。すると、多くの生徒は授業で学んだことをどのように使っているかを察知し、自分の取り組みの参考にするようになります。くれぐれも教師が説明をして「このようにしなさい」と説教じみたことを言わないようにすることです。

Q13 単元のゴール（発表）の時まで児童の意欲を持続させる秘訣がありましたら教えてください。学期のはじめに導入してから３か月間、ゴールまで児童の意欲を持続させることが難しい時があります。

● 長期的な目標、中期的な目標、そして短期目標を考えておくことです。学期の最後に用意されているプロジェクトは「長期的な目標」となりますので、学期の最初にそれを伝えておきます。さらには、そこに向けて必要になる「つけたい力」、用意する言語活動の内容を子どもたちに説明していくようにします。つまり、単元がバラバラではなく、一貫したストーリーのように繋がっていくこと、それを納得できるように子どもたちに意味づけているかどうかがポイントです。教師の仕事は、「今からこれを勉強します」と指示をすることではなく、取り組む課題が「何のためにやる活動で、最後は何ができるようになればいいのか」を具体的なイメージとして与えていくことです。

Q14 講義の中で、学習指導要領には話すこと［発表］の外国語活動の目標には「人前で～」とあるので、ペアやグループではなく学級全体での発表とおっしゃっていました。もちろん発達段階や児童生徒の発

達段階に応じて、全体の前でのプレゼンテーションも大切です。東京学芸大学の粕谷教授がおっしゃるように、人前であればペアやグループでもよいと思うのですが、中学年から発表＝いつも全体でなければいけないのでしょうか？ペアやグループでの話すことは［やり取り］という認識でしょうか？

● 「発表」と「やり取り」を区別することが大事です。ペアやグループでは、多くは情報のやり取りになります。発表とは「伝えたいこことをまとめて話す」ということです。そこで、小学校では、段階的に「人前」で話すという経験がつめるようにしていくことが大事です。人間は人前でやることで、そのプレッシャーを乗り越える努力をするようになり、それによって自信をつけるからです。ペアやグループでの発表ばかりでは、緊張感が得られません。ペアから４人、６人、８人へと段階的に数を増やしていくことが望まれます。さらに、全体で全員が発表するという時間はなかなか取れないので、学期の最後に統合的なタスクとして行うようにする、中間発表ではグループで選ばれた代表が全体で行い、よいモデルを見せるようにすることが考えられます。いずれにしても、良いモデルを見せるということが学習のポイントになります。

【その他】

Q15 「思考・判断・表現」の評価の仕方、ルーブリック等ありましたら教えていただきたいです。「思考・判断・表現」は教師側が課題を設定するのではなく、生徒が設定するとお話されていたので、評価の仕方はどうするのか気になりました。

● 学習指導要領、または文科省の HP の資料でそれが詳しく出てきています。子どもが自己決定する内容であっても、教師がそれを適切に評価する視点を持っておかないと指導はできません。それは、定期テストを作成するときにも重要なポイントになります。

Q16 中学校の先生から「小学校のうちに外国語の好き嫌いが分かれてしまっている。」という話を聞きました。アルファベットの大文字・小文字も曖昧な児童もいるようです。国語の漢字では習った漢字を日常生活で使わせることで覚えさせることができますが、アルファベットは日常生活でなかなか使う場面がありません。どのように定着させることができるでしょうか。

● 母語も英語も同じ言葉です。漢字もそれを使おうとするのではなく、伝えたい内容があり、その中で「ああ、ここで習った漢字が使える」と子どもたちが自ら判断します。つまり、英語でも「自分ごと」として書きたいと思うようなトピックを与えることです。教師が、窮屈に習ったことを使って教師の指示する内容（条件）を書かせようとコントロールしてしまうと、書きたいものにはなりません。

Q17 実は私は昨年まで私立の高校で非常勤をしていたのですが、高校の指導要領が変わったのに、まったく教え方に変化はありませんでした。ある意味、発想の転換をしてみたくて英語教育の原点に立ち帰りたく、決死の覚悟で小学校の専科となりました。今の国の方針であれば、全国どこでも同じような教育方針、同じ意識を持った教師が子供たちの教育を担わないと不公平だなと痛感しています。私に教えられた子供たちの将来のために一歩でも進歩したいです。若い先生でも、私のような古びた教師でも、同じように自信を持って授業をしていける方法はありますか？"

● 町田市立金井中学校の栗橋先生は、東京都の英語教師塾の講師をされています。授業を公開され、また研究授業の助言もされています。その方の授業を３年生の 10 月に拝見し、私は「子どもたちは積極的

に英語を使っていますが、内容が薄いように思います。深める方法を知りたいですか」とお聞きしました。普通であれば、教職年数が 20 年を超えるようなベテランであれば、残り時間が少ないこともあり、「もう時間もないので」と二の足を踏まれることが多いと思います。しかし、栗橋先生は「子どもたちのポテンシャルを高めるためには何でもやります。挑戦させてください」と言われました。それ以降、6 回授業を拝見し、その都度、「こうしたらいいですよ」とアドバイスをしてきました。その結果が、ご覧になった映像に映っている生徒たちの姿（ノートに英文を書かず、自分たちで作ったスライドを見せながら Show and tell で堂々と SDGs のトピックで問題点、解決策を述べました。さらに、フロアーから出された即興の質問に対して、すぐに英語で答えていました。もし、暗記する学習であれば、プレゼンのために暗記をして、それで終わってしまい、質問が出てもパッと理解できず、Once more. Please say it again. のように言い返すはずです。しかし、金井中の生徒たちは、インタビュー・マッピングによって即興でやり取りができる（キーワードを深掘りできる）ようになっていたので、そのまま理解することができ、かつ自分たちがとことん考えた内容だったので、問題意識もしっかりと持っており、あのような即興のやり取りができたのです。

　要は、質問をされている方のように「私が変わらなければ！」と本気で取り組む姿勢があるかどうかです。今回、『英語教育』10 月号で執筆をされている 4 人の中には、昨年度まで指導主事をされていて、そのまま教頭にならず、指導教諭として現場に戻られた方、世界高校生ディベート大会の日本の代表ジャッジ（決勝でジャッジ）をされた方もおられます。いずれも、自分の過去のやり方に固執せず、「思考ツールを使った実践」に挑戦され、新しい境地を広げられました。年齢は関係ありません。20 代であっても、研究授業を毎年のように行い、授業改善をされている方もおられます。一度拝見しましたが、同年代の方の授業とは雲泥の差でした。

Q18 本日はありがとうございました。中嶋先生は生徒の可能性や能力を信じてあげていてとてもすてきだなと思いました。なぜそんなに信じてあげられるのですか…？有意義な講義をありがとうございました。2 学期に早速授業で活用させていただきます。

● 荒れた学校を 3 つ経験し、教師がコントロールしようとすればするほど子どもたちの心は荒れるということを学んだからです。そして、自己表現を授業の核にすることで、子どもたちの迸るような感性に触れることができたからです。授業の主役は子どもたちです。彼らの「言いたい、書きたい、伝えたい、知りたい、知ってほしい」という気持ち（生活の論理）をどう掘り起こすことができるか、それを学習指導要領に書かれている目標にどう繋げるか（教科書を終わることではない）を心がけることで、自然に時間を忘れて活動に取り組むようになります。

Q19 鶴ヶ島市では学び合い活動に力を入れていますが、英語の授業で学び合いを多く取り入れると、日本語で話す場面が増えてしまいます。どのような課題で学び合いをさせると英語を話す生徒が増えるのかヒントを頂けると幸いです。

● まとまった内容を英語で伝えようとすると、どうしても「言えない部分」が出てきます。それを日本語で伝えてしまうのではなく、どう「今、用意した日本語の内容を小学校の低学年の子どもたちでもわかるような内容に言い換えたらいいか」を考えさせ、それを自分の知っている英語で表現するという指導をしてください。こうすると、小学生が dinosaur（恐竜）を long, long ago animal と表現しました。ま

た、「しつこい」や「くどい」を「同じことを何度もいう」とか「前のことを忘れる」というように言い換えられるようになります。「習っていないから言えない」ではなく、「こんなふうに言い換えられる」と考えられるようになると、日本語に逃げずになんとか工夫するようになっていきます。

Q20　4 年生を担任しています。語彙力がある程度ないと、道案内や 3 hint クイズは難しいかな、でもやりたい、子供たちに外国の言葉が話せることがどれだけ楽しいか（自分は話せないので）伝えたいです。どうしたらよいのでしょうか。口ごもってしまうのではないかと思っています・・・。

● ４年生で可能な活動を考えることが大事です。活動には、全てねらいがあります。また、対象となる年齢を考えることが不可欠です。今回ご紹介したのは、高学年、さらには中学校で実践可能な内容が多く、それをそのまま中学年でやってしまのではなく、まずはマンダラートで「言いたいこと」から連想する言葉を考え、それを使ってどう伝えるかをみんなで考えてみることをお勧めします。

Q21 いろいろと見せていただいた映像の中で、小学生が活発にやりとりをしている場面がありましたが、大体どのくらいの期間であのような姿になるのでしょうか。

● １ヶ月でできるようになっています。ただ、教師が本気になって、単元全体を考えた系統的な帯学習、言語活動から逆算することで割り出した練習の内容とその時間を最初に考えられました。つまり、教科書会社が用意した単元の指導計画に疑問を持ち、つけなければならない力を学習指導要領で洗い出し、教科書を終わらせるのではなく、実際にやり取りができる、即興で質問ができるようになるにはどんな指導が必要かを考えられました。

　たとえば、泳げるようになるには、どんな練習が必要で、それぞれ何時間くらい必要になるか。バスケットボールでドリブルやパスが試合できちんと使えるようになるには、どんな練習をどれくらいしなければならないかを考えます。それが time on task の考え方です。Task on time（決められた時間でこなす）では身につかないことが多く、まずは抜本的に time on task でクラスの実態から必要な活動を考えてみることをお勧めします。

Q22 洋楽で英語を学ぶ実践があったら教えてください

● この紙幅では難しいです。よって、参考になる書籍をご紹介します。田尻悟郎さん、久保野雅史さん、北原延晃さんと一緒に書いた『決定版！授業で使える英語の歌 20（正続）』（開隆堂出版）、拙著『”英語の歌”で英語好きにするハヤ技 30』（明治図書）があります。そこでは、聞き取り、読み取り、スピーチ、自己表現にどう活かすか、英語の歌をテストに使う方法、３年間の歌の指導計画と歌、リクエストアワーで英語好きにする方法などを紹介しています。英語の歌を有効に使うと、子どもたちはみるみる英語が好きになっていきます。右脳を使う学習なので、それをずっと覚えており、何十年も経ったクラス会で一緒に歌うこともあります。

Q23 本文の指導方法をご教示いただきたいです。特に、音読方法についてアイデアをいただけるとありがたいです。

● 本文の読解はクイズのようにどれだけでも面白くすることができます。また、音読は全ての基礎基本として欠かせません。ワンパターンではなく、手を変え、品を変え、緊張感と達成感を持ちながら練習が

できる方法があります。HP（nakayoh.jp）の「和歌山県の星林高校の飛び込み授業」で書いた内容をご覧ください。みるみる聞き取れるようになる方法、音読が上手になる方法を紹介しています。

Q24「思考・判断・表現力」を身につけさせられるような授業に感銘を受けました。質問ですが、このような授業を展開していく中で、クラスに場面緘黙の生徒がいたときに、授業をよりよくしていけるような方法はありますか？

● 場面寡黙の子どもであっても、気づけること、ふと決心することは同じです。同じことを徹底するのではなく、多様性を活かす指導、ギャップ（情報、意見、理由）をどう作るかを考えるようにします。また、書く活動で、紙（一人１枚）をリレーのようにグループや列で回していくようにすると、内容（仲間からのメッセージ）を特化し、そこから繋げよう、深めようとするようになります。

教師は、無理に話させようとするよりも、生活の記録でのコメントや誰もいないところで声をかけてやるようにするなど、時間をかけて関わるようにすることが大事です。不登校の子どもを、教師の力で無理やり登校できるようにするのではなく、物事には旬の時期、偶然や必然などがあり、ある程度自然体で対応するようにします。

Q25 今回の講義は我々が考える理想の形に近いと思いました。ぜひ次中嶋先生のご講義を聞く機会があれば、低学力層へのアプローチで同様な内容の授業をするとき、どのように指導するのかをご教示いただきたいなと思いました。

● 低学力層の子どもたちに対して、教師の力でなんとかしたい、なんとかしなければと思い込まないようにすることが大事です。できないのではなく、そもそも習熟に時間がかかるのに、その時間を十分に与えていないからかもしれません。話す活動は苦手でも書くことならまだ力が発揮できるかもしれません。個々の能力や習熟度、さらには個々の興味・関心を理解し、それをどう活かせるかを考えた時に有効なのは、仲間の考え、仲間の意見、それに対して思ったことを伝える場面を作るとか、いくつか仲間が書いた英文の中から真似てみたい表現を選んで、それをヒントに自己表現をしてみるとかすると、苦手な生徒も being involved される（自分ごととして捉える）ようになります。

また、授業の課題は、低学力の子どもたちでもわかるようにと、簡単な内容にしないことが大事です。英語が好きな子どもたちでもやってみたいという課題（発展性があること）になっていること、その取り組みや内容を全体で共有することで、全体の底上げが生まれるようにすることが大事です。質（バー）を下げてしまうと途端に「探究しようとする気持ち」が萎えてしまいます。